



Hakuai Story

博愛物語

P r o l o g u e

(起 詞)



封印された過去がある。誰にも話す^{こと}機会^{てら}のなかった^{てら}銜いのない過去がある。計り知れない悔恨の情と含羞の匂いが揺曳する過去である。そんな^{とき}過去を背負って、誰もが黙して、一生を終えるのだろうか。

博愛会の誕生やその行路に秘められた^{であい}邂逅^{わかれ}や離別。歩みの途上で流した多くの^{もの}同志たちとの汗と涙の結晶。

そんな波乱に満ちた生い立ちや足跡を、人生の最終楽章に差しかかった者として後進の^{もの}同志に伝えてゆく義務もある。

若き日の^{おも}希いの萌芽は、奇跡のように開花して、淀みない30余年の歳月が過ぎ去った。

その歳月に刻まれた^{できごと}刻印の総てとはいかない迄も穏やかな融雪の陽だまりに^み體^{ゆだ}を委ねてみようか。これまで、どうにか存続できた真実が、ほんの^{わず}微かな誇りとなって、^{とき}歳月の湖底から^わ湧き上がり、初めて、そんな気分^ににさせてくれる。

記憶の糸に、少しばかりの振動が加われば、自閉されていた^{もの}過去たちが記憶の闇から解き放たれ、追憶の時空いっぱい
に彷彿として甦る。

目を凝らせば、さまざまな追憶の情景が浮かんでは、曖昧
模糊とした^{それぞれ}過去が、一気に脈絡を持ち始める。脈絡を繋ぐ糸
は、若さゆえの^{おも}希いの連鎖か。夢の力か。

時の流れを逆行する眺めには、苦渋に満ちた錆色の光彩ば
かりが目に留まって仕方がない。

想起すれば、無から構築してゆく^{はじまり}創業の頃は、その総てが
^{うる}迂路ばかりの辛酸を^な嘗める日の連続だった。

資本の薄さは、財政危機を報知する警告灯を、幾度となく
点滅させた。消灯を急ぐための金融機関への奔走は、月末毎
の恒例だった。消せども消せども警告灯の点滅は治まらなか
った。組織崩壊を^{はら}孕んだ^{あらし}大嵐も吹き荒れた。孤独な決断も迫
られた。幾度、眠れぬ夜を遣り過ごしたことだろう。

それでも夢を語り続けた頃がある。夢中になった時がある。

感動の^{であい}邂逅もあった。

若き日の青臭い^{おも}希いが、この物語の
始まりだった。

^{ひたむき} ^{おも}
一途な希いは、湧昇する夏雲のように



果てしなく広がって、夢を育み、篤行の人との機縁に恵まれ、

そして、^{かたち}結実となった。それから 30 余年の^{つきひ}星霜が流れた。

個人の業績などを誇示するつもりは毛頭ない。澁みない歳

月を^{けみ}閲した存続は、まさに天佑に恵まれた^{ぎょう}僥幸としか^{たと}譬
えようもないからだ。

どんな^{あのひ}過去を語ろうが、^{いま}現在こそが総てなのだ。

そんな^{おもい}思慮も駆け巡る。

さまざまな^{おもい}想念を呑み込んで、遡及する時空の^{かがや}耀きは、

徐々に収束し始めて、遂に、暗闇の中に孤灯の^{かがや}耀き^{てん}一灯の
みが残存する。

全ての始まり。創業の原点^{とき}である。

そこは、博愛会の建立の意義と

その精神を、素直に再思できる場所

でもあった。



専門用語と硬い文章ばかりが闊歩^{かっほ}する医療現場である。

敢えて、「博愛物語」と誇称^{タイトル}すぎる戯銘^{タイトル}をうって、脳裡に甦

る^{もの}念^{もの}たちに情感を込めながら綴^{おも}ってゆこうと惟^{おも}っている。

博愛会の生い立ちを、誰にも語ったことのない^{こころ}機微^{こころ}に触れ

る^{しょう}濫^{しょう}觴^{しょう}を、過^{とき}去^{とき}が風化する、その前に、大いなる気概と彫

心^{るこつ}鏤^{るこつ}骨^{るこつ}の覚悟を以って書き残そうと考える。

博愛会創設の原点とその航跡を、しっかりと記憶の枠に留め

て貫^{ねが}えればと希^{ねが}っている。

この起筆が、明日への道標とその勇往邁進に、^{おも}希^{おも}いの尽に

寄与できればと願って止まない。

著者 那須 良昭

発行所 医療法人財団 博愛会

〒810-0034

福岡市中央区笹丘 1-28-25

tel:092-741-2626 fax:092-741-2627

本書に記載されております文書につきましては、転載・無断使用を禁じます

